

現実感をもった英語教育を：英語教育改革私案

渡部 友子

1. はじめに

日本の英語教育の問題を“Eternal False Beginner’s Syndrome”と呼ぶ研究者がいる(Richards 2011)。基本的な英語運用能力が身につかず、永遠に初級レベルのやり直しが続くからである。実際に大学1年で中学レベルの復習をしている授業は少なくない。日本語と英語は発音も文法も大きく異なるため、英語は日本語母語話者にとって学びにくい言語ではある(白井2008)。しかしそれを考慮しても、初級止まりの学習者が多すぎる。原因は教育の仕方にあると考えるのが妥当である。

その原因に思い当たるきっかけになった出来事が2つある。1つ目は前任校で遭遇した。工学系短大の2年生対象の英語授業で、教材として「喫煙がいかに健康に悪いか」を科学的根拠に基づいて論じた英文を扱った直後、受講生数人が、喫煙所でタバコを吸っているのを目撃したのである。タバコには中毒性があるので禁煙は簡単にはできない。しかし喫煙の有害性を学んだ直後は、控えようと思うのではないか。そうではなかったことに少なからず衝撃を受け、筆者はその場を立ち去った。

2つ目は本学工学部の2年生を担当した中で起こった。授業で読んだ教材の内容をベースに口頭発表を行い、発表後に他の学生からの質問に答える、という活動を行っていたのだが、複数の学生が意外なところで戸惑った。それは、Do you think…? やWhat do you think about X?のような質問である。答えが難しかったのではない。質問の中のyouが自分を指している、つまり自分のことを聞かれている、ということが理解できなかったのである。その場にいた筆者は、YOUを強調して発表者を指差し、質問の意図を理解させた。その後学生たちは、同様の質問に対応できるようになった。

この2つの出来事は、「英語が学生の現実から切り離されている」ことを示しているように思われる。英語の授業でどんな内容の英文を読んだとしても、その内容は自分に何の影響も与えない。英語で話す練習をしたとしても、それは教科書に出ている架空のモデル会話で、自分はその中にいない。日本の英語学習者の多くはそのように育てられているのではないか。そしてこの現実感のなさが、彼らの興味を失わせ、英語の学習を阻害しているのではないか。そのように筆者には思われる。

このように言うと、反論が聞こえてきそうである。日本で英語を学ぶ環境では、英語に触れるのは基本的に授業中だけであるから、現実から切り離されるのは当然ではないか、という反

論である。しかし現実から切り離されたものはどんな科目でも学びにくくなる。個人的な例を挙げれば、数学の対数計算である。高校時代にはよく理解できず、その後使うこともなく忘れていたが、最近になって言語データを統計的に処理する際に対数が使われることを知った。なぜ必要かも理解できた今であれば、恐らくしっかり学べるだろう。現実感がなくても覚えることができる優秀な生徒はもちろんいる。しかし大多数はそうではない。

本稿では、どうしたら大学での英語授業に現実感を持たせることができるかを提案する。第2節では、現実感のない英語教材とはどのようなものかを実例で示す。第3節以降は、学習者に合わせることで現実感を持たせる3つの方法について検討する。具体的には、学習者の専門分野に合わせる、学習者の興味に合わせる、学習者の学力に合わせる、の3つの方法である。

2. 現実感のない英語教材とは

現実感が失われやすいは、リスニング・スピーキングの教材と文法の教材である。まずリスニングの例1を見てほしい。英語の教科書には、このような「モデル会話」がレッスンの最初に置かれていることが多い。

[例 1] *Hello Again!: Cultural Exchange and Everyday Life* (p.12 より)

Brian: Wow! This place is buzzing! Look at all the people!

Kazu: Yes. It's quite a popular hangout, especially for young people.

Amy: What a beautiful day, too! Is the weather always like this in Tokyo?

Kazu: I wish! No, it won't be long before the rainy season hits us.

Amy: The rainy season? How long does that last?

Naomi: Oh, five or six weeks, I guess. Now do you understand why I liked June and July in Chicago?

Amy: Yeah. How does anyone stand it?

Brian: Hey, check that guy out!

Kazu: Who?

Brian: The one with his nose to his computer.

Kazu: How! Another workaholic. I bet he's checking the stock market.

Brian: He looks a little worried. You're probably right.

Kazu: He'll probably kick back with his friends this evening.

Amy: Where? At home?

Naomi: No! Right here in Roppongi! There are lots of clubs, places to hear live bands, tons of great restaurants...

Amy: Sounds like a place we'll be have to tour again tonight.

Kazu: Year, that would be fun. Sometimes it gets pretty wild around here.

Brian: Really?

Naomi: Uh-huh. Young people really like to dress up, too. You'll see all kinds.

Amy: Sounds a bit like Chicago.

Kazu: No. I think there's much more of a party atmosphere here.

この会話は、はとバスに乗って日本人2人がアメリカ人2人に東京を案内している、という設定で展開されている。日本で英語を学ぶ学生にとっては、自分にも起こりうるという意味で身近な状況設定である。会話にも躍動感があり面白く展開している。しかし残念ながら、その場（六本木ヒルズの前）にいて周りの状況を見ることができない人にはよく理解できない内容である。例えば、This place is buzzingは、大勢の人がいてザワザワしている場所にいて初めて意味をもつ表現である。The one with his nose to his computerも、指している人が見えなければピンと来ない。（隣のページに挿絵があるものの、コンピュータに顔を近づけて仕事をしているようには見えないため、分かりにくい。）また、六本木という場所自体が、地方に住んでいる人にとってはよく知らないかも知れない。

リスニングの練習、あるいはスピーキングの手本として提示されるこのような教材は、音声だけを切り出して学習者に与えるため、それだけで現実離れしてしまうことをまず指摘したい。自分とは全く無関係の会話（自分に向かって話されていない会話）を聞く、という状況は、日常生活ではあまり多くない。テレビ番組などを見る時と、電車や喫茶店などで近くの席の会話を聞く状況くらいしか筆者は思いつかない。しかしこの場合でも、話し手本人や話し手がいる場所を見ることはできる。自分が直接関わらない話を、話し手が見えない状態で耳を澄まして聞く、となると、かなり特殊な状況になる。盗聴器が拾った会話を聞く場合がこれに当たるだろう。（電話は自分に向かって話され、話し手の場所が分かることが多い。またラジオも、不特定だが聞き手がある程度想定して話され、話し手の場所はスタジオであることが多いため、見えなくても少し想像できる。）逆に言えば、私たちが現実に行うリスニングは、話している人の顔が見え、どんな場所にいるかも見える状況で行われることが圧倒的に多い。音声だけを取り出したリスニングは特殊である。

音声だけを聞かなければならない状況では、聞き手側の背景知識が内容理解の鍵を握る。盗聴が可能なのは、盗聴器が特定の人や特定の情報をねらって仕掛けられるからである。誰が何を話し出すか分からない場所に盗聴器を仕掛け、拾われた音声をすべて聞き取るのは考えにくいし、不可能であろう。しかし、例1のようなリスニングをCDで行う場合、それに近いことを学習者に行わせている。話し手4名については事前に簡単な紹介があるのみだし、話題に出る場所（六本木、シカゴなど）に関する知識はあまりないだろう。かつ、為替市場なども（話

題としては重要性が低い) 知識がないかも知れない。このような聞き手は、単語レベルの断片的な情報を捉えるのがやっとであろう。例1は、聞き取りが極端に困難な教材であると言える。

このような困難な教材を使用した場合、さらなる現実離れが起こる。それは、聞き取れるまで何度も聞かせることになるからである。私たちが現実に行うリスニングでは、「聞き直す」機会はそれほど与えられない。対面で行う(会話の中での)リスニングでは、聞き取れなかった場合相手にもう一度言ってもらうことが可能だが、2回を越える繰り返しをしてくれる人は稀であろう。また放送や講演などで一方的に流れてくる音声は、録音していない限り再度聞くことはできない。つまり実生活では、聞き取れない部分があっても聞き直しはできず、聞き取れた部分で何とかするしかない。よって1回で聞き取れない部分が多すぎれば、リスニング自体が成り立たない。ところが英語の授業では、1回で聞き取れないのは普通で、全部聞き取れるまで何度も聞き直す。つまり現実ではあまり行わない形になってしまいがちなのである。

次に文法教材での現実離れを指摘したい。例2は中学生向け文法問題集の応用問題からの引用である。

[例2] 『学研ニューコース問題集中学1~3年英文法』(p. 24より)

日本文に合うように、下線部に適する語を入れなさい。(筆者が正解を挿入)

(1) 男の人がむこうの木の下にすわっています。

A man is sitting under the tree over there.

(2) その男の子たちは先生を待っていました。

The boys were waiting for their teacher.

(3) あなたのお父さんはいま電話を使っていますか。

Is your father using the telephone?

例2は、進行形を正しく使えるかをチェックする問題である。文法教材は特定の文法項目を練習するために文脈から切り離される。効率的に型を練習するためにそうするのであるが、(2)のthe boysは誰なのだろう。どこにいたのだろう。例えば、放課後の教室に男子生徒が数人いるのを見て何をしているのか聞いたら「担任のX先生を待っている」と言った、という出来事を誰かに語る時になら、(2)のように言うかも知れない。しかし、ほとんど学習者はそのような状況を想定しないまま、正しい形を入れる練習をするだろう。

正しい文法の操作は、どこかの段階で練習しなければならず、またそれができるようになったかどうかテストしなければならない。しかし上のような練習だけを何回やっても、使えるようにならない。それは、表現されている内容が学習者にとって架空だからである。覚えた言

葉が現実感をもたない。これが「英語を何年勉強しても身につかない」という結果をもたらしていると思われる。

非現実感が言葉の学習に障害をもたらすことは、山鳥（2002）に指摘されている。私たち人間は、言葉をたよりにいろいろなことを理解するが、言葉は私たちがそれまで経験し記憶した事象と結びついて初めて意味を持つ。従って、言葉を覚えようとする時、それを支える経験記憶がないと、その言葉は「音韻記号として覚え込まれるだけになり、意味のない状態が生じ」、使えない言葉になってしまうのである（山鳥2002, 55）。その例として山鳥は、コンピュータ操作をよく知らない人にとってのコンピュータ用語を挙げている。上の例2のような日常生活の内容を扱う場合、それを支える経験記憶を学習者はもっているはずである。ただ、それと結びつけずに機械的な操作だけをさせるなら、その言葉は覚えたが使えない言葉になりやすい。

では、言葉が現実感をもつ、とはどういうことか。立命館の小中一貫英語教育プログラムからの報告を使ってそれを示したい。本プログラムでは、題材の内容（意味）に重きを置き、文法や語彙は意味を表現するための手段として指導を行っているようである。湯川他（2012）によれば、この教育を受けた生徒は「普通の」生徒と異なる特徴がいくつかある、と言う。その一つが「自分の生活の中で遭遇しそうにない発話」、例えば以下のような文法練習問題に違和感をもつ、という特徴である。

- (4) That (sleeping, slept) baby isn't my sister.
- (5) Who is the man (talking, talked) with my wife at the door?
- (6) He is a singer (loving, loved) by many people.

これは中3生向けに入試対策として渡された練習問題の例である。「普通の」生徒は、正しい分詞をさっと選んで終わるだろう。しかし立命館の生徒は、正しい分詞を選びながら、完成した文の意味を考え、状況を想像して戸惑う、というのである（湯川他2012）。例文(4)は、赤ん坊が大勢いる場所で、自分の妹を探しているのだろうか。例文(5)は、妻の浮気でも疑っているのか。例文(6)は、Heが誰か分からないのですっきりしない。このような反応が出るのは、立命館の生徒たちにとって英語の言葉が現実感をもっているからである。

英語を学び、使えるようになってほしいと願うなら、学習者にとって現実感のある題材を使って授業を展開すべきである。その方法は3つある。次節ではまず、学習者の専門分野で必要な英語を教える、という方法について述べる。

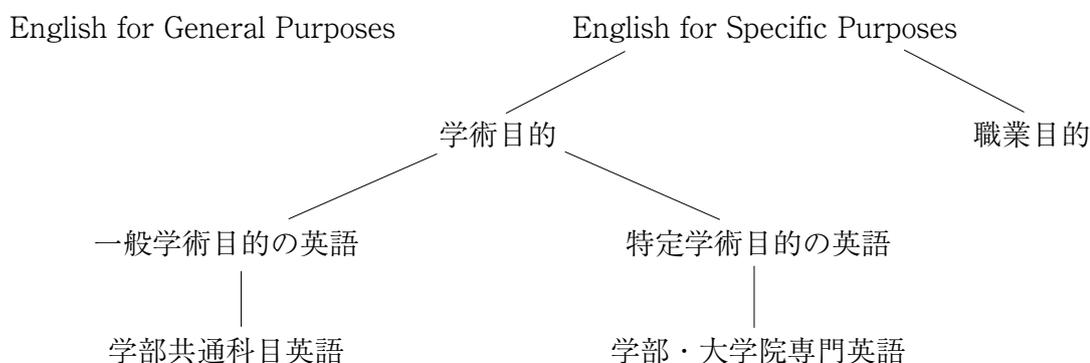
3. 専門分野に特化した英語教育

筆者が学部時代を過ごした大学では、アメリカ文学研究を専門とする教員が、医学部の学生対象の授業でアメリカ文学のテキストを講読していた。文学作品を読むことは医学部の学生にとって役に立つのだろうか、と当時疑問に思ったことを記憶している。これは、学生ではなく教員の専門分野によって教材を決めている例である。必修英語の授業が、自分が大学で学ぼうとしていることと無関係の内容であれば、現実感のなさを生み出し、冒頭の例のように、英語の授業で扱った内容が全く学生の中に残らない、というむなしい結果をもたらす。

中学や高校では、生徒が将来どのような英語が必要になるかが不明で、可能性が多様であるため、特定の分野に絞った指導はできない。そのため汎用性のある教材が選ばれる。その点、大学では学生の専門分野が絞られてくるため、英語教育も専門分野で必要なものに絞って行えば効率的である。

汎用性をもった英語教育はEnglish for General Purposes, 特定の分野に特化した英語教育はEnglish for Specific Purposesと呼ばれる。ESPはさらに、学術目的と職業目的に分かれ、学術目的はさらに、分野別と分野共通に分けられる。この分類を図示したものが図1である。

図1：大学英語教育の目的の分類（寺内他編2010, 217ページの図を基に作成）



職業目的の英語教育は、職業訓練の一環として行われる。例えば、客室乗務員に必要な英語力の養成などが、これに当たる。それに対し、大学で行う英語教育は、大学で学ぶのに必要な英語力を養成するものである。大学の場合、大学で受ける教育が卒業後の職業に直結していないことも多いので、職業目的の英語教育を別途受ける必要も出て来るだろう。いずれの場合も、根底にあるのは、ニーズ分析である（Dudley-Evans & St. Johns 1988）。これは、学習者の想定する進路で、どのような英語能力が必要なのかを調べる、という作業である。

大学での英語教育を構想する時、まず考えなければならないのは、専門教育を受けるのに英

語力は必要か、という点である。日本語で講義を受け、日本語の文献を読み、日本語でレポートや論文を書いて事足りるのであれば、大学で英語を学ぶこと自体が不必要になる。専門教育で英語が必要な分野、つまり英語で情報を得たり発信したりしないと学びに支障が出る分野は、実は限られているのではないだろうか。教育上のニーズ（がないこと）を無視して英語を必修科目にすべきではない、と筆者は考える。

たとえ専門教育で英語が必要なくても、卒業後のためにやはり何らかの英語教育は必要である、と考えるならば、職業目的の英語教育に切り替えるべきであろう。観光学を学ぶ学生は、客に対応できるだけの会話力と、観光地に関する資料を読んだり書いたりする能力をつけたい、と思うかもしれない。工学を学んで技術者になろうとする学生は、製品の取扱説明書などを読んだり書いたりする能力が必要になるかも知れない。

寺内他編（2010第4章）は、日本国内の大学で専門教育もしくは卒業後の職業のための英語教育を行っている事例を19件報告している。例えば芝浦工業大学工学部では、工学系論文を執筆するための知識とスキルを指導している。これは専門教育を受けるのに必要な英語力の養成をしている例である。一方、神戸大学医学部の「診療のためのスピーキングとリスニング」、青森公立大学経営経済学部の「ビジネス会話」などは、卒業後の職業を意識した教育と言えるだろう。

職業に直結するような英語教育に対しては、大学の専門学校化を懸念する向きもあるかも知れない。しかし、大学の専門教育に英語が必要ないのに英語科目を教育課程の中に置くとすれば、職業に多少なりとも結びつく内容にした方が、学生の学ぶ意欲も生まれるであろう。

このような、学生の将来的ニーズに合わせた英語教育を行おうとした時の最大の問題は、まず教材不足である。2009年の調査（寺内他編2010による引用, 47～49）によれば、国内で市販されている日本人大学生向けESP教材は200冊弱ある。その半数近くは理工系教材が占めており、続いて医学・看護系、経済・ビジネス系、法律系、となっている。学生の専門分野に合わせた教材を用いて英語教育を行うことは、少しずつ可能になってきていると言える。しかし既存教材を精査すると不十分なものが多く、教材開発が遅れている分野も多数存在するという（同上）。従って、専門分野に対応した英語教育を行おうとした場合、担当教員が教材とカリキュラムを作成する必要性が生まれる。

次の問題は、誰が教育を担当すべきかである。一般に英語教員は、医学、工学など他分野の専門知識がなく、専門教育の教員は英語力、あるいは英語を教えるスキルがない。従って、ESP教育を行うためには、英語教員と専門教育教員との連携が必要である（寺内他編2010, 114～116）。しかし連携は多大な時間と労力を求められるため、現実には難しいかも知れない。

学生の専門分野に合わせた英語教育が、教える側の事情で行えない場合、次善の策としては、

学生が生きる現実世界とつながった題材を選ぶ、という方法がある。これについて次節で述べる。

4. 学生の実生活とつながった題材

一般的な英語教材、特にオーラルスキルを扱った教材は、英語圏での場面や内容が取り上げられていることが多い。一例を挙げると、*English First Hand Book 1* (Helgesen 他著2009)は、自己紹介から始まり、クラスメートと個人的に仲良くなっていけるように会話練習が組まれている。これは英語圏で英語学校に通う学習者にとっては身近な内容だが、日本にいる学習者には現実感もてないと思う。なぜならクラスメートは日本人のみで、教室を出たら英語で会話する理由がないからである。この点で、第2節で例1として紹介した教科書は、日本で外国人と交わる状況設定であるため幾分よいのだが、すでに述べた通り、取り上げられている観光地に行く機会がない学習者には、あまり身近に感じられない。

それでは、学生の実生活と直接つながる題材にはどんなものがあるだろうか。筆者はまず健康や環境問題などを挙げる。例えば、睡眠がいかに重要か、アレルギーはなぜ起こるか、ストレスとどうつき合うか、などのテーマは、一般社会でよく話題になっているし、学生生活を送る上でも重要である。ゴミ問題や温暖化なども同様である。

また、身の回りの事象、事件、社会問題も有効である。例えば、東日本大震災のガレキ問題、異常気象による被害など、時事に特に詳しくない学生でも、どこかで耳にしたことがある話題であれば理解しやすい。他には、身近なものの起源を学ぶ、というのも学生の興味を喚起する。例えば、オリンピックの起源、ハロウィーンの起源などである。これら以外に、筆者がこれまで自分の担当授業（本学の英語I及び英語II）で扱った題材の例を以下に示す。

適度な飲酒の効果、体内時計のしくみ、シャワーヘッド内のバクテリア、
熱中症の予防法、運転中の携帯電話操作の危険性、喫煙がもたらす害、
ダイエット法の検証、食欲が抑えられない理由、腹八分目で長生き、
ナビゲーションシステムの問題点、プラスチックゴミのリサイクル
赤十字社の起源、紛争地域で教育を受けられない子どもたち
コーヒーは脳を活性化する、二酸化炭素濃度が上がると集中力低下

さて、学生の実生活とつながった題材選択により、言葉の学習を支える意味理解がしやすくなったとする。次は言葉を学習させる段階となる。一般的な教科書では、語彙学習、文法学習、及びリスニング、スピーキング、ライティングの練習を、読ませるテキストから切り離して行

う構成になっていることが多い。典型的なのは、新出単語に対して辞書の定義を確認する、テキストを読ませたあと架空の「モデル会話」を新たに与える、などである（例えばFujii & Murray 2009の教科書を参照）。しかしこれでは、読んで理解した内容から、言葉がまた切り離されてしまい、学習がうまくいくとは思えない。筆者は、読んだテキストから切り離さずに、特定の語や文法に注目させたり、スピーキングなどの他の技能を練習させる方法を提案したい。筆者が英語Iの授業で行っている手順を以下に紹介する。

- ①英文を読む前に、大体の内容の口頭説明を英語で聞く（リスニング）
- ②英語の質問リストをガイドに、英文を読む。（リーディング）
- ③英語の質問リストの質問に、口頭で答える。（リスニング+スピーキング）
- ④英文の内容を、英語で整理して書く。（ライティング）
- ⑤英文の内容を、英語で口頭説明する。（スピーキング）

ちなみに、読む前の英語口頭説明は、オーラル・イントロダクション（またはオーラル・インタラクション）と呼ばれる手法である（金谷他編2009）。何が書いてあるか全く分からない状態で文章を読むことは、外国語でなくとも困難だと言われる（望月編著2010）。また、読む単語の発音分からないことも読みを困難にする（門田2002）。オーラル・イントロダクションは、文章に出てくる表現を使いながら、事前におよその内容を話して聞かせることで、読みのプロセスを助けるために行なうものである。ただし言葉で説明するだけでは理解が難しいので、視覚補助を使う必要がある。筆者は、写真や図を入れたスライドを使ってこれを行なっている。

上記①～⑤に示した授業の流れは、1つの読解教材を通して4技能を統合することを目指している。つまり、内容を理解するために聞き、読み、理解できたことを話したり書いたりする、という形態である。これは、新しい高等学校学習指導要領（文部科学省2009）が言うところの「技能の統合」の1つのあり方である。

語や文法の学習は独立させていないが、行なっていないわけではない。学習者に注目させたい語や文法は、実は質問リストの中に取り込まれている。例えば、以下のテキストを読ませる場合、その下にある質問リストを配る。下線部アの文法が表す意味を確認する質問は3番、下線部イの語の意味を確認する質問は5番、下線部ウの語の意味を確認する質問は13番、その具体的な中身を確認する質問は14番である。

Earthquakes often strike Japan. Some of those earthquakes cause tsunamis. Japan has suffered hundreds of tsunamis over the years. But ⁽⁷⁾ few were as powerful as the tsunami that struck on March 11th, 2011. Last month, pieces of ⁽⁴⁾ wreckage from the Japanese tsunami began reaching the western United States. A concrete and metal dock was found along the Oregon coast, about 170 kilometers southwest of Portland. It had taken almost 15 months for the 20-meter long object to make the 8000 kilometer trip across the ocean.

Experts say they expect more wreckage – scientists call it marine debris – to wash up on American coastlines over the next few years. Nancy Wallace directs the Marine Debris Program at NOAA, America’s National Oceanic and Atmospheric Administration. She says: “There’s a lot of ⁽⁹⁾ uncertainties. I think that’s what we’re learning throughout this process, is that it’s very hard to determine how much debris is still floating in the water, what type of debris that is and where it will be coming ashore.”

(続く3段落は省略)

[英文は *Voice of America* 2012年7月30日の記事より。以下の質問は筆者作成]

Paragraph 1

1. Do all earthquakes cause tsunamis?
2. How many tsunamis has Japan experienced in the past?
3. Was the tsunami on March 11 in 2011 the biggest in history?
4. How did the effect of the tsunami appear in the United States? When?
5. Pieces of “wreckage” are things that are _____ . (1語)
6. What was found along the Oregon coast? How big is it?
7. How much distance did the dock travel? For how long?
8. What is Paragraph 1 about?

Paragraph 2

9. Do experts think wreckage will continue to arrive on the western coast of the United States?
10. What is another name for this type of wreckage?
11. Who is Nancy Wallace? What does she study?
12. What is NOAA? What’s their job? (Paragraph 4参照)
13. Wallace says “There’s a lot of uncertainties.” This means that there are many things that _____ .
14. What does Wallace’s team want to find out?
15. “Coming ashore” means reaching the _____ . (1語)
16. What is Paragraph 2 about?

学習者の習熟度が中級あるいはそれ未満の場合、知らない単語や文法がまだ多い。従って手順①②では、まず理解することに重点を置き、語句も文法も、最初は意味を確認することにとど

めている。その後の③で少し口頭でのやりとりを練習し、④⑤で理解したことを学習した表現で再生する、というステップにしている。

上の①～⑤で示した指導手順が言語学習を促すと思われる側面は二つある。一つは、白井(2008及び2012)が言う「大量のインプットと少量のアウトプット」というバランスを確保できている点である。学習者は聞いたり読んだりを充分した後、それを基に話し書く活動を課されている。二つ目は、単語学習に必要な「意味のある繰り返し」(Nation 2001: Lightbown & Spada 2006による引用, 98)を含んでいる点である。上に示したように、一つの内容を聞いたり読んだり書いたり話したりすることで、同じ表現に何度も触れれば、その表現は学習者の記憶に残りやすくなるだろう。

上に示した1～16の質問は、本物の質問 (genuine questions) ではなく特殊な質問で、display questionsと呼ばれる (Lightbown & Spada 2006)。質問は通常、答えが分からないからするのだが、上のような質問は、質問する側 (教員) が答えを知っていて、学習者は答えることで自分が理解できていることを示す、という形になっている。だから特殊である。教室外では本物の質問が圧倒的に多いのに教室内ではそうならないことを問題だとする指摘もある (Long & Sato 1983: Lightbown & Spada 2006 による引用, 130～131)。しかし日本で英語を学ぶ学習者は、教室外で誰かに本物の質問を英語でされる機会はほとんどない。彼らにとって教室内こそが現実である。教員と学習者の間で教材の内容を確認するやり取りは、教科に関わらず、教室という場では最も現実的なコミュニケーションである。従って、学習指導要領が言うところの「授業を実際の[英語での]コミュニケーションの場にする」(文部科学省2009: カッコ内は筆者挿入) というのは、教材の内容が理解できたかを英語で確認する、という形でも実現できると考える。

以上、題材を学生の実生活に近づける方法をいくつか紹介した。最後に、学習者の英語習熟度に合わせる必要性を論じる。

5. 学生の学力に合わせる

教材の内容が身近だったとしても、教材で使用されている英語のレベルが学習者のレベルを大きく越えていれば、学習が困難になってしまう。従って、学習者の英語習熟度に合わせて教材を調整する必要がある。

まず、筆者個人のレベル調整のやり方を紹介する。教養学部の英語クラスは習熟度によって、上位、中位、下位の3クラスに分けられている。英語Iではどのレベルを担当する場合も、英語学習者向けの素材を提供している *Voice of America* の Special English のサイトから教材を作成している。ただし下位クラスには短めの文章 (300語台)、上位クラスには長めの文章 (400

語台)を与える。内容面では、上位クラスは多少抽象的な部分を含んでいても大丈夫だが、下位クラスにはなるべく具体的なものを与えるようにしている。前節に挙げたトピック例で言えば、「シャワーヘッド」の教材は下位、「紛争地域の教育問題」の教材は上位クラスに与えたものである。中位クラスには基本的に下位クラスと同じ教材を与えるが、下位よりもスムーズに読めるので、課題を少し難しくする。

英語II（上位クラスのみ担当）では英文のレベルを少し上げ、*Science News for Kids*と*Student Encyclopedia Britannica*から教材を作成している。この2つのサイトに載っている文章は、英語圏の児童生徒を読者に想定していると思われる。従って、日本の学習者にとっては見慣れない表現も出てくるが、内容が実生活に近ければ理解できるようである。前節に挙げたトピック例では、「コーヒー」や「二酸化炭素濃度」は前者、「オリンピック」や「赤十字社」の起源は後者のサイトからとったものである。ちなみに英語IIでは、英文を読んだ後、別の表現に書き換える練習を行なっている。

しかし学生の英語習熟度が極度に低い場合、端的に言えば、中学校レベルの英語が習得されていない場合は、このような調整では対応できない。中村（2005）が報告するように、大学生の中には、アルファベットを読んで書くことがうまくできない学生もいる。単語レベルでつまづいているので、まとまった文章を読むことは不可能である。本学でも最下位クラスの中には、そのような学生が少なからず存在すると推測する。また、単語の読み書きは大丈夫にしても、中学校レベルの単語力と文法力がない学生は、相当数存在すると思われる。

中村（2005）が言うこれらの「疑似初心者」に対し、大学でどのような英語教育を施すべきだろうか。中学校の復習をする、というのが一つの考えである。実際に本学で筆者は、中学生向けの文法問題と思われる教材が、教卓の中に残されているのを見たことがあるので、そうしている教員はいるようである。しかし、このやり方が学生の助けになるとは思えない。なぜなら、そのやり方でうまく学べなかったために今に至っているからである。すでに述べたように、文法問題集は言葉を内容から切り離して意味のない状態にする。これが言葉の学習を妨げているのである。

筆者は、学力が低い学生にこそ、彼らの実生活に直結した題材が必要だと考える。内容を彼らがよく知っているものにして、理解の負担を小さくするのである。数年前に工学部の英語IIで最下位クラスを担当した際に、筆者は、以下のような題材を選んだ。

気球の構造と発達、自転車の発明と発達、自動車の発明と発達
橋の構造、エンジンの仕組み、時計の種類と仕組み

題材は*Scholastic Children's Encyclopedia* (2004) から探し、表現を簡素化し200語未満（3段落程度）の長さに編集して与えた。図や写真をたくさん取り込んだスライドでオーラル・イントロダクションを行ったあと文章を読ませ、質問に従って重要点だけを書き出させた。最後に、教員のスライドを使って英語で発表させ、学生同士で簡単な質疑応答も行なわせた。

この質疑応答が、実は中学校英語のよい復習になったと思っている。学生は、内容的にそれほど難しい質問はできない。例えば、自転車のスライドを説明した学生に対し、Do you have a bicycle? What color is it? How often do you ride your bicycle? といった質問が続くし、文法や発音のエラーも多い。しかし「疑問文の作り方」を問題集で復習するよりは効果があったはずだ。学生自身も、自分たちがいかに初歩的な質問しかできないかを自覚したようで、慣れてきたら少し難しい質問にチャレンジしていた。このような学習が起こったのは、題材が身近で、何の話をしているかよく理解できていたからであろう。

このように習熟度が低い学生に対しても、彼らの能力に見合った教材をあつらえることは可能である。中学校レベルまで落とさなければならなければ、それも致し方ない。しかし、中学校レベルまで落とすことと、中学生向けの教材を使うことは同義ではない。あからさまに後者を行なった場合、学生は自尊心を失い、逆に意欲を失うかも知れない。上の例のように、知らないうちに中学英語の復習になっている、という授業形態が望ましいと考える。

6. おわりに

本稿では、学習者の現実から切り離された状態で行なわれる英語教育が、英語学習を阻害しているのではないかと問題提起した。そして、英語の授業を学習者の現実に近づける方法を3つ、具体的に提案した。それは、学習者の専門分野に合わせる、学習者の実生活に近づける、学習者の学力に合わせる、の3つである。

市販の教材を使わず、教員が自分で教材を集め課題を作ることは、労力の要ることである。しかし常に「新鮮な」教材を使うことには利点もある。それは、授業で取り上げた題材が、ニュースや情報番組の話題と呼応することである。例えば、低炭水化物ダイエットを扱った時はちょうど巷で話題になっていたし、大震災のガレキがアメリカに漂着している問題は、しばらくしてNHKの番組で取り上げられた。紛争地域の子どもたちが教育を受けられずにいる、というテキストを読んだ時は、教育を受ける権利を求めて運動していたパキスタンの少女が銃撃を受けて大怪我をしたというニュースを聞いたばかりだった。教員である筆者にとって、英語の授業は自分の知的生活と切り離されていない。

学生にも、英語の授業で学ぶ内容が現実世界とつながっていることを認識し、題材を通して知識を得て考え、時には行動に移してほしいと願う。例えば「シャワーヘッド」のテキストは、

アメリカの家庭や公衆のシャワーヘッドをサンプル調査したところ、およそ30%で大量のバクテリア検出、という内容だった。これを読んだ後、自宅のシャワーヘッドの衛生状態を確認したり、交換したりした学生がいてほしい（少なくとも筆者は交換した）。

そのような影響が出ているかも知れないと思わせるエピソードが一つある。英語Iで指導した学生が3年生になり、筆者のゼミに所属した。ゼミ生全員にどんな題材の研究論文を読みたいか尋ねたとき、言語学や英語教育関係のテーマがたくさん挙がったあと、一人の学生が「アメリカの食生活についても興味がある」と言った。英語Iで読んだアメリカの子どもの肥満問題の教材が面白かったから、というのがその理由であった。残念ながらその希望には添えなかったのだが、喜ばしく思った。ちなみにこの学生は英語Iで下位クラスだった。

英語教育の目的は、学生に英語という言葉を手で学んでもらうことだという認識には、誰も異議を唱えないだろう。しかし英語教員はどうしても、言葉自体を教えることに重点を置きがちである。これが落とし穴ではないかと筆者は思う。教材の内容が学生の現実から離れてしまうと、言葉が意味のない記号と化し、覚えられない、あるいは覚えたが使えないという状態になってしまう。内容重視の授業を行なうことが、言葉の学びを促す近道だと筆者は考える。

引用文献

- 金谷憲他編（2009）『英語授業ハンドブック〈中学校編〉』大修館書店
- 門田修平（2002）『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか』くろしお出版
- 白井恭弘（2008）『外国語学習の科学』岩波新書
- 白井恭弘（2012）「大量のインプットと少量のアウトプットの重要性」英語教育フォーラム
「小中高等学校の英語教育と第二言語習得研究の関連」パネルディスカッションでの発表
（宮城教育大学2012年12月8日）
- 寺内一他編（2010）『21世紀のESP—新しいESP理論の構築と実践』大修館書店
- 中村朋子（2005）『大学におけるリメディアル教育への提言：英語のつまずきに関して』大学
教育出版
- 望月昭彦編著（2010）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法（改訂版）』大修館書店
- 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領外国語編』
- 山鳥重（2002）『「わかる」とはどういうことか—認識の脳科学』ちくま新書
- 湯川笑子他（2012）「英語アウトプットの機能とレベル：立命館小中一貫英語教育の事例より」
日本児童英語教育学会第32回秋季研究大会口頭発表（大阪成蹊大学10月28日）
- Dudley-Evans, T. & St. Johns, M. J. (1988) *Developments in English for Specific Purposes: A Multi-disciplinary Approach*. CUP.

Lightbown, P. & Spada, N. (2006) *How Languages are Learned* (3rd Ed). OUP.

Richards, Jack (2011). “Competence and performance in language teaching.” Plenary lecture given at JALT 2011 Conference in Tokyo, November 19.

引用教材

学研編 (2007) 『学研ニューコース問題集中学1～3年英文法』 学習研究社

Fujii, T. & Murray, A. (2009) *Health Matters: Health Awareness for College Students*. Pearson/Longman.

Helgesen, M. et al. (2008) *English Firsthand Book 1*. Pearson/Longman.

James, D. E. (2007) *HELLO AGAIN!: Cultural Exchange and Everyday life*. Thompson Publishing.

Scholastic Reference (2004) *Scholastic Children’s Encyclopedia*. Scholastic Inc.

Science News for Kids <http://www.sciencenewsforkids.org>

Student Encyclopedia Britannica <http://kids.britannica.com>

Voice of America “Special English” <http://learningenglish/voanews.com>

